

同窓生 シリーズ

65



37回生

花輪智史

はなわ ともふみ

◆プロフィール

1966年世田谷区生まれ。東京都立大卒、東急グループ社員を経て世田谷区議に。2001年都議選当選、2005年2期目長、文教副委員長、公営企業決算副委員長など歴任。東京都会青島委員、東京都会青島委員、都議会議長、交通政策調査会

「アイヨくつ」と今でも叫ぶののだろうか？

「新宿高校の思い出」といわれてまづ思い浮かぶのは、館山臨海教室の大遠泳の際の掛け声である。

墨汁を流したような灰色の海。台風が近づいているらしい。小雨が降り、水面はかなり揺れている。立ち泳ぎをしながら息を整える。足を突きたいけれども、つけるはずはない。もう半分ぐらい来たのかな？ まだまだかな？ 本当に最後まで泳ぎきれぬのかな？ などと考える。

ふと見ると、私の傍らにポートがいる。ポートの上からは「アイヨくつ」という掛け声が。出発前、「絶対泳ぎきれぬから、がんばれ！」といつてくれたOBである。私はそのOBの言葉を思い返し、大きく息を吸って、蹴伸びを再開する。

大遠泳のゴールは突然やってきた。足がなかに触れたと思ったら、そこはもう砂浜だった。立ち上がろうと思ったが、身体が重くて立ち上がれない。なんとか砂浜に転がり込む。すると、先にゴールして心配してくれていた同級生たちが声をかけてくれた。

そもそも水泳が得意でない私は、

臨海教室の何日も前から憂鬱だった。熱でも出れば参加しなくてもすむかも…と風邪をひくのを祈ったくらいだ。しかし、幸か不幸か熱を出すこともなく、館山へ。

悪天候の中、厳しい練習が始まった。やったこともないバタフライに悪戦苦闘。しょっぱい海水を何度も飲んで、涙が出そうになった。

宵つ張りの私にとつては、早起きもつらかった。目覚まし時計の代わりにかかっていた音楽が松本伊代の曲だったことを、なぜかよく覚えていた。臨海教室の最終日には泳力検定が行われた。前日までできなかったバタフライができるようになっていた。遠泳を泳ぎきったという自信が、自分自身を成長させたのだろうか？

一生懸命指導してくれた「アイヨくつ」のOBや同級生たちも、一緒に喜んでくれた。

あれから二十余年が経ったが、臨海教室を終えたときの達成感と充実感が得られたことは幾度もない。何か壁にぶつかったときには、あの館山の海を思い出す。つらくて先が見えないときでも、「あきらめなければ必ずゴールはやってくる。今がっらいほどゴールしたときの喜びは大

きくなる」と、あのとき倒れ込んだ砂浜の心地よい感触を思い出す。そのときの達成感や充実感は、一人の力で得たものではない。同生や先生、OBの方々など、信頼する多くの仲間が応援していただからそのものだ。その信頼感絆となつて、今でもゆるぐことはない。これは、私の人生にとって何りの財産であるから、生涯、大切にしていきたいと思っている。

当時の同級生たちとは、相も変らぬ付き合いが続く。昼休みに抜出したり、部活を終えたあとに行つた、中華料理店「こまどり」がなくなつてしまつたのはなんとも残念なことである。が、その跡地に建られたビルにあるレストランは、在の私たちが集う場となつている。